

簿記の学習を難しくしているものは何か
—本学『簿記入門』を受講する学生を対象にした実証研究—

What Makes Bookkeeping Difficult to Learn?
Empirical study of university students enrolled in “Introductions to bookkeeping”

友寄 隆哉

Takaya Tomoyose

Abstract

When the number of people learning bookkeeping increases, the Japanese economy is strengthened. However, many believe that acquisition of bookkeeping skills is difficult. Consequently, the number of university graduates with training in bookkeeping is decreasing. To solve this problem it is necessary to make bookkeeping classes more interesting. In this study of 53 university students enrolled in an introductory bookkeeping course, I first discuss why bookkeeping is difficult to learn.

A time series analysis of the data suggested the following factors that make bookkeeping difficult to learn ; (1) principles of double entry bookkeeping ; (2) large number of account titles ; (3) large number of rules and principles associated with bookkeeping ; (4) difficulties calculating depreciation ; (5) difficulties calculating cost of sales ; (6) difficulties creating bookkeeping worksheets. Additionally, the decrease in available study time leading up to final exams, was identified as an external factor contributing to make bookkeeping difficult to learn.

1. はじめに

筆者は、簿記を学ぶ人口（以下簿記人口という）が増えれば日本経済は強くなると考えている。経済活動の中核をなす企業活動は、簿記のフレームワークを通して認識・測定・記録・報告される。簿記を学ぶことは、単に記帳技術の習得にとどまらず、企業活動を包括的に理解する力を養うことにつながり、その結果として、目的適合的な行動を選択できる可能性を高めることができる。このような人材が増えれば、企業活動は円滑に進み、ひいては日本経済に対してよい影響を与えることにつながると考える。簿記を含む財務会計の知識は、ビジ

ネスマンに必須の教養とされるが、残念ながら、以下に示す通り、近年の簿記人口は減少傾向にあるといわざるを得ない。簿記教育に携わる一人として、この状況には危機感を覚える。そこで本研究では、簿記人口の増加を最終的な目標とし、その足元を固めるため大学における簿記導入教育に焦点を当てる。簿記の習得は難しいといわれて久しいが、この問題の解決へ向けた第1歩として「何が簿記の習得を難しくしているのか」を明らかにしたい。簿記人口の推移を概観するため簿記関連資格の受験状況を以下に示す。

日本商工会議所のホームページによると日商簿記検定3級の受験者は過去10年間8万人から12万人の間ではほぼ横ばいで推移している。2級も同様に約5万人から7万人の間で推移している。一見、簿記人口は、過去10年で安定的に推移し、増加も減少もしていないとみることできる。ところが、日商簿記1級の受験者は、最も受験者数が多かったのが2010年11月試験で22,008人であった。これに対し直近の2018年11月試験では、受験者数が9,852人であった。日商簿記1級は2010年11月試験をピークに減少傾向を示し、この8年間で受験者数が55.2%減少している。

次に、国税庁のホームページから税理士試験の過去13年分の受験者と合格者、一部科目合格者の推移をみると2006年は受験者・合格者・一部科目合格者は、それぞれ54,203人・1,126人・8,726人であるのに対し、2018年は、30,850人・672人・4,044人であった。こちらも2006年から13年間、一貫して減少傾向を示し、受験者数で43.1%、合格者数で40.3%、一部合格者数で53.7%減少している。

最後に、金融庁・公認会計士・監査審査会ホームページより公認会計士試験の過去13年分の試験願書提出者と合格者の推移をみると願書提出者数では、2010年に25,648人でピークに達した後、減少傾向に転じ、2015年で最低の10,180人、その後若干増加し、2018年は11,742人となっている。合格者数では、2007年の4,041人をピークに減少傾向を示し、2015年の1,051人を最低として2018年は若干増加し、1,305人となっている。それでも2018年は、ピーク時の2010年に比べ、願書提出者数で54.2%、合格者数で36.1%減少している。

以上より、日商簿記3・2級を学ぶ簿記人口は、この10年間で大きな変化はないが、日商簿記1級、税理士試験、公認会計士試験など、大学教養以上の簿記を学ぶ人口は減少傾向にあることがわかる。この状況を西南学院大学の工藤栄一郎教授は、「ショーウィンドウを覗きに來てはいるが、中には入ってこない状況」と比喩的に表現した（日本簿記学会第34回全国大会高校簿記教育懇談会基調報告より：平成30年8月24日）。日商簿記3・2級を学んではみたものの難しいと感じて、あるいはもう十分と感じて、次のステージを目指さない簿記学習者が、この10年間増加傾向にあることがわかる。簿記や財務会計を学べばよかったと後悔している人が続出している状況も存在する一方で、これは非常に「もったいない」ことである。日商簿記3・2級を超えて多くの人が大学卒業程度の簿記を学ぶためにはどうすればよいか。その答えの一つとして簿記の入門授業をわかりやすく魅力のあるものにすることもあるのではな

いか。本稿ではその第1段階として筆者が担当した『簿記入門』の授業を通して得られたデータを考察し、上記の足掛かりとする。

2. 研究の目的

筆者は約20年間、専門学校で簿記・会計を教えてきた。主な対象は、簿記・会計を専攻する専門学校生、または日商簿記検定対策講座を受講した社会人であった。2018年4月に産業能率大学情報マネジメント学部に入職し、必修科目の一つである『簿記入門』を担当した。前職との大きな違いは受講生である。専門学校生も社会人も、簿記を学ぶことを主体的に選択しているが、本学の『簿記入門』を受講する学生は、必修科目の一つとして授業に参加しているのであり、興味・関心の度合いは各人によって異なる。これは興味・関心の薄い学生に「つまらない・難しい」と感じる授業を提供してしまうと、簿記嫌いを輩出してしまう反面、興味・関心を持たせることに成功すれば、簿記人口を増やすことができるというチャンスでもある。しかし現実には、簿記に苦手意識を持つ学生の方が多い。序章で述べた通り、簿記人口の増加が、日本の経済を強くするとの私見に立てば、『簿記入門』の担当は簿記人口の増加に直接貢献できる貴重な機会と考えることができる。そこで、「魅力的な『簿記入門』の授業を提供するためにはどうすればよいか」との観点から、「大学の簿記導入教育」に関する文献にあたった。しかし、何を教えるのかという理論的な研究は多く存在するものの、どのように教えるのかという実証的な研究は意外なほど限られ、実証データの不足を感じた。そこで、本研究においては、「何が、簿記の習得を難しくしているのか」を明らかにするために、2018年度前期に担当した『簿記入門』全14回のデータを収集・分析し、次年度以降のシラバスと教授法の改善に資する提言を試みる。

3. 先行研究

文献を渉猟したところ、以下の先行研究が見つかった。

教授内容に焦点を当てた研究として、明治時代までさかのぼり、批判的に『簿記テキスト』を検証したもの（久野1990）、簿記学は実学であるとしつつも、ハウ・ツー的解説論のみではなく、これを支える基礎の分析から学問は出発するとするもの（茂木1988）、高校における簿記導入教育として高校の教科書を紹介し、簿記教育の課題と解決への取り組みを論じたもの（粕谷2009）、会計学や複式簿記における技術の本質を考察し、複式簿記の原理とその論理的導入方法について論じたもの（椎名1987）、我が国の簿記書で見られた伝統的な教授法について検討した後、試算表等式に基づく教授法を提示したもの（原2018）などがある。また、東証1部上場企業等26社へアンケート調査を行い、大学の簿記会計教育で使用する従来のテキスト内容について論じたもの（中川1990）、東証1部上場企業等265社にアンケート調査を行い、

日商簿記検定が、正社員の採用、人事及び教育・研修にどのように利用されているかについて論じたもの（近藤2018）がある。さらに大学での簿記教育をトータルな会計学教育システムの一環として位置づけ、各種資格試験との関連を論じたもの（瀧田1994）、日商簿記検定が、最も簿記知識の普及に貢献しているとし、簿記の入門として3級の検定試験が必要であることを強調し、その3級の試験問題の傾向と分析を行っているもの（河野1998）、初学者向けの入門級として2017年4月に導入された「日商簿記初級」についてその可能性を認めつつ、改善へ向けた提言を行っているもの（山田2017）などがある。学生にアンケート実施し、学ぶ側の実態調査を行った研究としては、「簿記原理」を受講する143名にアンケート調査（回収率77.6%）を行い、簿記学習の実態についてまとめたもの（斎藤1990）、「簿記原理Ⅰ」を受講する1クラス23人にアンケート調査を行い、学生の関心と理解を調査し、提言を行うもの（大城1992）などがある。最後に本研究が最も参考にしたものとして、日本簿記学会簿記教育研究部会平成24・25年度中間報告をあげる。これは同研究部会に属する3大学と2短期大学の590人の学生へのアンケート調査を行ったもので詳細な検討がなされている。この他にも、e-learningを用いた簿記教育の実践事例（木本2002）、コンピュータを手段とする簿記教育を論じたもの（鈴木2004）、簿記教育を4つに分類してその種々相や関連を論じたもの（大藪1993）、キャッシュフロー会計の観点から簿記導入教育の有用性を論じたもの（橋本1999）などがある。しかしいずれのアンケート調査も授業終了後の1回のみであり、時系列に沿った調査を発見することはできなかった。本研究は、学生数53人と規模は小さいが、第6週を除き授業の第1週から第14週まで全13回にわたってアンケート調査を行い、時系列にそって学生の学習状況を調査し多くの生の声を収録した。この点が本研究の実践的貢献である。

4. 研究方法

授業終了後、1週間の授業外学習を終えて翌週アンケートを提出する。そのアンケートにその週の授業項目が理解できたかどうかをYES・NOで回答し、自由記述欄に感想などを自由に記述する。また、manabaによる練習問題・復習課題の学習状況は、教員側で把握可能である。アンケートは第1週から第14週まで、manabaの練習問題・復習課題は第3週から第14週まで収集した。研究対象は、2018年度前学期に筆者が担当した『簿記入門』クラス53人である。2018年4月18日の第1週授業から同7月16日の第14週授業までの4か月間、上記アンケートとmanabaの練習問題・復習課題の得点を収集した。そして、授業項目別の理解度をグラフ化し、理解度の低かった項目を洗い出すとともに、中間試験と期末試験を比較して50%以上得点が下落した学生と50%以上上昇した学生のmanaba練習問題・復習課題の学習状況を追跡した。

5. 結果

5. 1 第1週授業

第1週の目標は、簿記入門を学ぶことの意義を理解すること、簿記の学習の仕方を学ぶこと、勘定科目と貸借対照表・損益計算書の型を理解することである。初回授業の印象は今後の学習意欲に大きく影響する。覚える量の多さに苦手意識を持たせないよう、絶対に覚えなければならない項目、理解できればよい項目のメリハリ付けを行うとともに暗記よりも復習による繰返しを意識するよう指導した。図表5-1に第1週のシラバスを示す。

図表5-1 情報マネジメント学部「簿記入門」第1週シラバス

授業項目	概要	授業外学習
情報マネジメント学部での簿記の学習の仕方 簿記の基礎	・簿記入門を学ぶことの意義を理解する。 ・簿記の学習の仕方を学ぶ。 ・勘定科目と貸借対照表・損益計算書の形を理解する。 [テキスト該当章：1]	今週の授業を復習し、出席確認プリント②、練習問題プリント①と授業外学習プリント①を完成させる。

効果測定項目はシラバス3番目の貸借対照表・損益計算書の作成方法・形式とし、以下の4つの質問に、YES または NO と回答する方式で測定した（ある程度理解したが、まだ完璧でないものは NO にカウントしている）。結果を図表5-2に示す。

図表5-2 第1週の授業項目理解度

	質問内容	YES回答率		
①	貸借対照表の作成方法を覚えたか	86%	YES	NO
②	貸借対照表の形式を覚えたか	80%	YES	NO
③	損益計算書の作成方法を覚えたか	84%	YES	NO
④	損益計算書の形式を覚えたか	78%	YES	NO

回答者数 50人

各質問に対して YES と回答した学生の割合を図表5-2に示した。アンケートの自由記述欄にも、「貸借対照表と損益計算書の形式を覚えることが重要だとわかった（同旨他27名）。」との記述が多くあり、約8割の学生が第1週授業の内容を理解したといえる。また、授業を理解したものの困難を伴った記述としては「貸借対照表の中に、資産・負債・純資産があって、さらにその中に現金や借入金があったりと、覚えることがたくさんあって大変でした（同旨他6名）。」「何よりも、普段きき慣れない言葉をたくさん使うので、それに慣れるためにも、これからいろいろな形式の問題に触れ実践していきたいと思います（同旨他1名）。」等があった。さらに、上記の4つの質問に対して NO と答えた学生が質問①で14%（7名）、②で20%（10名）、③で16%（8名）、④で（11名）いることがわかった。自由記述欄には、「とても難しい

簿記の学習を難しくしているものは何か 一本書『簿記入門』を受講する学生を対象にした実証研究―

ので復習をもっとします !! (同旨他1名)」「1回目なのについていけなさそう… (同旨他1名)」等が並んだ。

5. 2 第2週授業

第2週授業のシラバスを図表5-3に示す。

図表5-3 第2週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
取引 仕訳 勘定記入	・簿記上の取引の概念を理解し、区別できるようにする。 ・借方・貸方の概念を覚え、取引を仕訳できるようにする。 ・仕訳した取引を総勘定元帳に記入（転記）する方法を覚える。 [テキスト該当章：2]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント③、練習問題プリント②と授業外学習プリント②を完成させる。

第2週の授業項目は、簿記上の取引概念の理解、仕訳の理解・勘定記入（転記）と複式簿記を学ぶ上で土台となる重要な概念である。仕訳の理解を深めるために『暗唱文』（授業ではインパクトを高めるため『仕訳の呪文』と呼んだ）を唱える方式を導入した。この『暗唱文』は、仕訳の重要要素をすべての問題にあてはめて暗唱するもので、仕訳問題に取り組むたびに仕訳の原理が確認できるよう工夫したものである。また、暗記に対する負荷の減少を目的として、補助プリント（A3用紙1枚表面のみ）を配布した。内容は、複式簿記の原理を簡潔にまとめた図と日商簿記3級に指定された勘定科目一覧表である。これを『3級まで使える宝物プリント』と名付け、常に携帯し必要に応じて参照するよう指示した。特に勘定科目一覧表は、新しい勘定科目が出てくる都度、当該勘定科目にラインマーカーを引かせその性質を確認させるとともに、学ぶべき勘定科目全体の中で、現時点までに学習した範囲がわかるよう工夫した。

第1週同様、理解度を測定するための質問事項と学生の回答を図表5-4に示す。

図表5-4 第2週の授業項目理解度

	質問内容		YES回答率	
⑤	簿記上の取引を理解できたか	94%	YES	NO
⑥	取引の10要素とその関連を理解したか	88%	YES	NO
⑦	勘定科目を分類できるようになったか	80%	YES	NO
⑧	仕訳とは何か理解できたか	86%	YES	NO
⑨	仕訳ができるようになったか	80%	YES	NO
⑩	仕訳を転記できるようになったか	72%	YES	NO

回答者数50人

図表5-4の結果より、質問⑤～⑨までは第1週の授業と同様に約80%～90%の学生が授業項目を理解したことがわかる。ただ質問⑩の理解度が他の項目と比較すると10ポイント程度低くなっているが、これは問題演習の累積により第7週の間中間テストまでには解消された。自由記

述欄には、「今回も、貸借を覚えればできると思った。また、manabaの小テストでだいぶ覚えられた…。」、「しっかり解けた。理解できた。」と手ごたえを感じられた記入が20通あった。他には、「(授業を)きいてちゃんと理解できるけど、少ししたら忘れてしまう。」、「…復習しないと大変なことになると感じた。」、「簿記は毎日しないと忘れてしまうと思うので…(同旨他8名)」等、簿記の難易度ではなくその「忘れやすさ」に不安を感じる記述が散見されるようになった。一方、質問⑤、⑥にNOと回答した学生の中には「仕訳や転記が難しかった(同旨他1名)。」と未だ原理を理解していないと推測できる者が2名いた。

5.3 第3週・第4週授業

第3週・第4週授業のシラバスを図表5-5に示す。

図表5-5 第3週・第4週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
現金取引	・簿記で扱う現金の概念を理解する。 ・現金取引を仕訳する練習をする。 ・仕訳を勘定に記入する練習をする。 [テスト該当章：3]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント④と授業外学習プリント③を完成させ、manabaの練習問題③と復習課題③をやる。
銀行預金取引	・普通預金と当座預金の概念を理解する。 ・普通預金と当座預金の取引を仕訳する練習をする。 ・仕訳を勘定に記入する練習をする。 [テスト該当章：4]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑤と授業外学習プリント④を完成させ、manabaの練習問題④と復習課題④をやる。

第3週では現金取引、第4週では銀行預金取引について授業をおこなった。第3週以降は、第1週、第2週で学習した授業項目が前提となるため、授業開始の5分間を用いて記憶の喚起を行った。具体的には『UP』と称し筆者がかける号令をなるべく大きな声で復唱するというものである。第2週配布の『宝物プリント』(簿記の基本をまとめた復習・参照用プリント)を用い、仕訳のルールと既に学習した勘定科目について復唱する。初めて『UP』行った際には、驚いた表情をみせる学生、失笑する学生も多かったが、第5週、第6週と継続して実施することで楽しみながら取組む様子をうかがうことができるようになった。

授業の理解度を測定するための質問事項とその回答結果を図表5-6に示す。

図表5-6 第3週・第4週の授業項目理解度

	質問事項	YES回答率	
⑪	現金とは何か理解できたか	100%	YES
⑫	現金取引の仕訳ができるようになったか	88%	YES NO
⑬	T勘定に記入できるようになったか	90%	YES NO
⑭	現金勘定の残高を計算できるようになったか	90%	YES NO
⑮	普通預金、当座預金とは何か理解できたか	81%	YES NO
⑯	普通預金、当座預金取引の仕訳ができるようになったか	77%	YES NO
⑰	T勘定に記入できるようになったか	75%	YES NO
⑱	当座借越の処理ができるようになったか	56%	YES NO

回答者数 質問⑪～⑭(第3週)42人、質問(第4週)⑮～⑱52人

第3週授業項目の質問⑪～⑭までの授業項目については、概ね90%程度の学生が理解している。特に質問⑬の勘定記入（転記）は、復習項目でもあり第2週の72%より18ポイント理解度が上昇して90%と、復習の効果が出ている。学生の声の中にも「やっていくにつれて解き方がわかってきました。この調子で簿記を得意になりたいです。(同旨他4名)」があり、繰返し復習することの重要性を実感し始めた記述がみられるようになった。しかし、第4週の授業項目（質問⑮～⑱）は、第3週に比べ理解度が下がっている。これは普通預金に加えて当座預金という勘定科目が加わるのが原因である。この当座預金は、学生の日常生活で出会う可能性が低く理解が難しい項目となっている。また質問⑰のT勘定の記入は、質問⑬と同一内容であるが、理解した割合が90%から75%に15ポイント下落している。これは当座預金の理解が前提で、連動して下げている。つまりT勘定の記入（転記）の前段階で躓いていることになる。当座借越の処理（質問⑱）は当座預金の処理を前提として行われるから、さらに理解度を下げている。これは前半7回の授業項目の中で最も理解度の低かった項目である。理解度77%の当座預金の処理をさらに応用させる処理なので難易度が急に上がる。学生の声の中に「当座借越とか、新しいのが出てきてドキリとしたけど、ゆっくり考えればわかった。」というのがあり、学生が新出の授業項目ないしは勘定科目に対し「ドキリ」とする心境となることは発見であった。また、「借越限度額とか当座借越契約が絡んでくると本当に分からなくなる。(同旨他11名) どうか理解したい。重要なことはとりあえず借金優先なのはわかるけどその借金は何なのか、その額をどこから引けばいいかわからない。」と理解したいのに理解できない苛立ちを訴える記述もあった。さらに、「今回の授業でだんだん簿記についていけなくなりました…(同旨他2名)」や「すごく難しくなってきた。用語が増えたので頭のうちがグチャグチャになってきました。(同旨他1名) 宝物表をよく見て整理する。」など、新出項目に対して理解や整理が追い付かない状況を訴える記述が散見されるようになった。

5. 4 第5週・第6週授業

第5週・第6週授業のシラバスを図表5-7に示す。

図表5-7 第5週・第6週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
商品売買取引 仕入と売上	- 商品売買取引の仕組みを理解する。 - 仕入取引を仕訳し、勘定に記入する練習をする。 - 売上取引を仕訳し、勘定に記入する練習をする。 [テキスト該当章：5]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑥と授業外学習プリント⑤を完成させ、manabaの練習問題⑤と復習課題⑤をやる。
商品売買取引 値引と返品	売上、仕入時の値引と返品の取引を仕訳し、勘定に記入する練習をする。 [テキスト該当章：6]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑦と授業外学習プリント⑥を完成させ、manabaの練習問題⑥と復習課題⑥をやる。

第5週と第6週では商品売買取引の授業を行った。仕入諸掛り・売上諸掛りなどの細かく場合分けしなければならない項目もあるが、イメージしやすい取引のため、理解度は比較的高いという結果となった。

図表5-8 第5週の授業項目理解度

	質問事項		YES回答率
⑱	三分法による商品取引の処理法は理解できたか	78%	YES NO
⑳	仕入取引の仕訳ができるようになったか	82%	YES NO
㉑	売上取引の仕訳ができるようになったか	84%	YES NO

自由記述欄には、「この仕入、売上はきき慣れた言葉なのですぐになれたと思います。(同旨他4名)」など理解しやすかった旨の記述がみられた。さらに「頭が整理されてきて、だんだん簿記が楽しくなってきた。(同旨他2名)」、「…何度も繰り返すことによって理解できるとわかった。」との記述は、多くの知識を簿記のフレームワークを通して整理し、反復練習でその定着を図るということを課題に取り組むことで体得した成功例といえる。また、「分かるようになってきたので、小さなミスが目立つようになってきました。理解はしているのに間違いになるのはもったいないし…(同旨他2名)」、「頭の中でごちゃごちゃにしないことが重要だと思う。(同旨他4名)」なども導入段階の壁を克服し、学習が次の段階に入ったことを示している。しかしながら、「苦手です。何をどうしてるのか分からなくなる。(同旨他1名)」、「練習問題に関しては、全くわからない。」など、部分的な疑問ではなく、簿記全体がわからなくなっている者が3名いた。

簿記の学習を難しくしているものは何か ―本学『簿記入門』を受講する学生を対象にした実証研究―

5. 5 第7週 中間試験

第7週は、第6週までの授業を前半と位置づけこの範囲で中間試験を行った。

図表5-9 第7週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
仕訳と勘定記入 の総合練習 中間試験	・これまで学習した取引の仕訳と勘定記入を総合的に練習する。 ・仕訳と勘定記入の試験を行い、解答・解説する。 [テキスト該当章：7]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑧と授業外学習プリント⑦を完成させ、manaba の練習問題⑦と復習課題⑦をやる。

第7週の中間試験は、第6週までの授業項目を試験範囲とし、全10問の取引を出題した。回答形式はこの10問の取引を仕訳し勘定記入するというものである。図表5-10に出題項目と得点率を示す。受験者は53名で、受験率は100%であった。

図表5-10 第7週実施 中間試験の出題項目と得点率

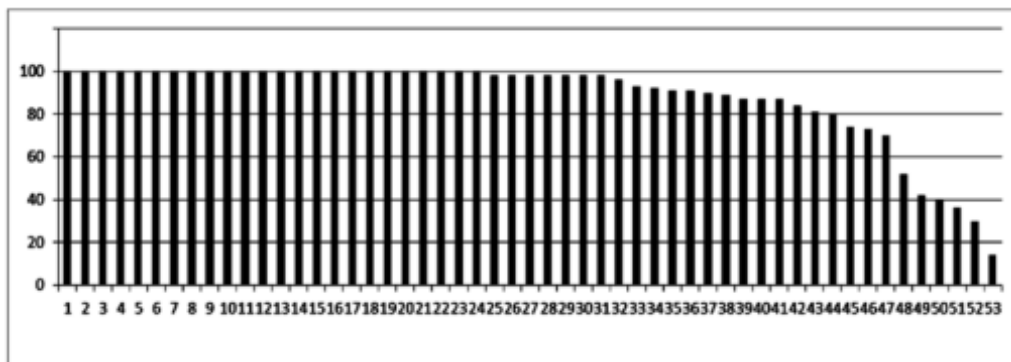
出題項目	得点率
仕訳 1 販売諸掛りを含む売上	85%
仕訳 2 引取費用を含む仕入	83%
仕訳 3 仕入返品	94%
仕訳 4 小切手受け取りと掛による売上	89%
仕訳 5 売上値引	85%
仕訳 6 小切手受け取りによる売上	94%
仕訳 7 給料の現金による支払い	98%
仕訳 8 株式配当金領収書の受領	92%
仕訳 9 売掛金の当座回収	98%
仕訳 10 買掛金の当座支払	92%
現金勘定	89%
現金勘定残高	77%
当座預金勘定	87%
売掛金勘定	85%
買掛金勘定	82%
売上勘定	83%
受取配当金勘定	92%
仕入勘定	79%
給料勘定	91%

受験者53人

中間試験の結果より、仕訳2引取費用を含む仕入取引の正答率が83%、売上値引取引の正答率が85%、現金勘定残高が77%と若干低い、概ね良い結果となっている。

次に、受験した53人を得点順に左から並べたのが図表5-11である。

図表5-11 中間試験得点



5. 6 第8週授業

第8週のシラバスを図表5-12に示す。

図表5-12 第8週シラバス

授業項目	概要	授業外学習
固定資産取引	- 固定資産の概念を理解し、その取得と売却の取引の仕訳の練習をする。 - 有形固定資産の減価償却について理解し、仕訳の練習をする。 [テキスト該当章：8]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑨と授業外学習プリント⑧を完成させ、manabaの練習問題⑧と復習課題⑧をやる。

第8週は、テキストに沿って、固定資産の定義・分類を説明した。その後、有形固定資産の取得、改良と修繕、売却の説明をした。次に有形固定資産の減価償却を説明した。新しい授業項目ではあったが、筆者に理解が難しい項目との認識はなく、通常の説明と問題演習を行った。しかしながら理解度は図表5-13のような結果になった。

図表5-13 第8週の授業項目理解度

	質問事項	YES回答率	YES	NO
㉓	固定資産とは何かを理解できたか	67%	YES	NO
㉔	有形固定資産取引の仕訳ができるようになったか	63%	YES	NO
㉕	減価償却とは何かを理解できたか	48%	YES	NO
㉖	減価償却の計算(定額法)ができるようになったか	50%	YES	NO
㉗	減価償却の仕訳ができるようになったか	52%	YES	NO

回答者数52人

第1週から第6週までの平均の理解度が83%であったのに比べると、急激な下落である。これまで順調に学習を進めてきた学生の中にも「少し8回目つまづいた。先生の研究室に質問に行きたいと思う。」「…固定資産のところはもっとじっくりと授業をしても良いと思いました。」というものがあつた。また、急に難易度が上がった旨の記述として、「急に覚えることが増えて大変でした。」「難しさが増しているような気がした。(同旨他9名)」などがあつた。減価償却は、カリキュラム・教え方の両面から工夫すべき点が多くある。

5. 7 第9週授業

第9週のシラバスを図表5-14に示す。

図表5-14 第9週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
決算と試算表	・決算と決算手続の仕組みを理解する。 ・試算表の仕組みを理解し、作成の方法を学び、練習をする。 [テキスト該当章：9]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑩と授業外学習プリント⑨を完成させ、manabaの練習問題⑨と復習課題⑨をやる。

第9週は、決算と決算手続について総論的に説明し、試算表の作成に入った。決算と決算手続の総論の説明は、テキストに沿いつつもコンパクトにまとめ冗長にならないよう留意した。初学者にとって決算や決算手続は具体的なイメージを持ちづらいので、早めに試算表作成の問題演習に入る方が学習効率がよいと判断したためである。試算表の作成は、第1週から第6週までに学んだ、「仕訳→転記」の次の手続きとして行われることもあって、これまでの知識の延長線上で理解しやすいのではないかと予想した。結果は図表5-15のとおりである。

図表5-15 第9週の授業項目理解度

	質問事項		YES回答率	
⑳	決算とは何か理解できたか	66%	YES	NO
㉑	決算手続きの順序は理解できたか	68%	YES	NO
㉒	決算予備手続とは何か理解できたか	64%	YES	NO
㉓	試算表とは何か理解できたか	70%	YES	NO
㉔	試算表が作成できるようになったか	68%	YES	NO

回答者数 53人

第8週の減価償却と比較すると、理解度が40%～50%の授業項目はなくなったが、依然として、前半（第1週～第6週）授業の平均理解度である83%より落としている。中間試験以後の理解度の改善が今後の課題である。自由記述欄には、「少しずつ分からないことが増えてきた…」、「だんだん難しくなってきた…（同旨他1名）」、「難しい言葉が多いので早く理解する…」

といった言葉が並んだ。比較的容易に理解できた旨の記述として、「今回は比較的簡単な内容で覚えやすかった…」、「9回目の内容は理解できた。」、「合計と残高の計算がしっかりできた。（同旨他5名）」というものがあつた。

5. 8 第10週授業

第10週のシラバスを図表5-16に示す。

図表5-16 第10週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
決算整理取引 売上原価の計算	・決算整理事項の意義について理解する。 ・売上原価の計算仕組みを理解し、決算整理事項としての処理の方法を練習する。 〔テキスト該当章：10〕	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑪と授業外学習プリント⑫を完成させ、manabaの練習問題⑬と復習課題⑭をやる。

第10週は、決算整理事項のなかでも難易度の高い三分法を前提とした売上原価の計算について説明した。三分法における売上原価の計算では、繰越商品勘定から仕入勘定へ、次に仕入勘定から繰越商品勘定へ金額を振り替える。この会計処理を理解させるために、まず「金額を振替える」とはどういうことか、次にその仕訳はどのように行うかについて説明した後売上原価算定の仕訳について説明した。

第10週の授業項目理解度は図表5-17に示す結果となった。

図表5-17 第10週の授業項目理解度

	質問事項		YES回答率	
⑫	決算整理が必要な理由を理解できたか	49%	YES	NO
⑬	どのような決算整理事項があるか覚えられたか	51%	YES	NO
⑭	棚卸表とは何か理解できたか	49%	YES	NO
⑮	三分法における売上原価の計算が覚えられたか	53%	YES	NO
⑯	売上原価の決算整理仕訳ができるようになったか	49%	YES	NO

回答者数 49人

難易度の高い項目であるので、ある程度の子想はしていたが、第10週授業の理解度も低いものとなった。自由記述欄には「単語が多くなってきて覚えきれなくなっているののでしっかり復習したいと思う。（同旨他1人）」と新出の学習項目に対して消化不良状態にあることをうかがわせるものがあつた。また、「とりあえず暗記でよいから、

（借）仕 入〔しい〕（貸）繰越商品〔くり〕

（借）繰越商品〔くり〕（貸）仕 入〔しい〕

は覚える。（同旨他10名）」のように、原理は理解できなかったが仕訳を暗記しておくという

記述も11名いた。さらに「全然、わかりませんでした。(同旨他14名)」という記述も15名に上った。第10週は、自由記述欄が白紙の学生も7名おり、前述の15名と合わせると22名となった。これは第10週の授業参加者数の44%を占める。これで第8週、第9週、第10週と連続で前半授業（第1週～第6週）の理解度の平均83%を20～30ポイント近く下回る結果となっている。「簿記は難しい」との印象が固定化してしまわないよう改善することが重要な課題である。

5. 9 第11週授業

第11週のシラバスを図表5-18に示す。

図表5-18 第11週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
決算整理取引 貸倒れの見積り 復習	・ 売掛金の貸倒れの処理方法を練習する。 ・ 決算整理事項としての貸倒れの見積りの方法を練習する。 ・ 売上原価の計算方法を復習する。 ・ 減価償却法を復習する。 [テキスト該当章：11]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑫と授業外学習プリント⑪を完成させ、manabaの練習問題⑪と復習課題⑪をやる。

第11週は、決算整理事項のうち「貸倒れの見積り」を学習し、売上原価の計算方法、減価償却法を復習する週である。新出の授業項目である「貸倒れの見積り」は、授業の前半で説明し後半は、理解が難しいという意見の多かった「売上原価」と「減価償却」を復習した。第11週授業項目の理解度は図表5-19に示す結果となった。

図表5-19 第11週の授業項目理解度

	質問事項		YES回答率	
③⑦	貸倒れの処理は理解できたか	68%	YES	NO
③⑧	貸倒引当金の設定方法は覚えられたか	68%	YES	NO
③⑨	売上原価の計算方法は復習できたか	64%	YES	NO
④⑩	有形固定資産の減価償却法は復習できたか	68%	YES	NO

回答者数 47人

質問③⑦「貸倒れの処理は理解できたか」、質問③⑧「貸倒引当金の設定補法は覚えられたか」の問いに対しそれぞれ68%の学生が「理解できた」と回答している。これは、第8週授業の質問②④「減価償却とは何か理解できたか」に対する理解度が48%、第10週授業の質問③⑥「売上原価の決算整理仕訳ができるようになったか」に対する理解度が49%であったことに比べ18～19ポイント高い結果となった。『簿記入門』で学習する決算整理事項の中では比較的理解しやすい授業項目といえる。さらに質問③⑨「売上原価の計算方法は復習できたか」に対しては「できた」と回答した学生が64%いて、初学である第9週授業の49%より15ポイント上昇している。

質問④「有形固定資産の減価償却法は復習できたか」に対しては「できた」と回答した学生が68%と、これも初学である第8週授業の48%よりも20ポイント上昇している。初学の際には理解が難しかった授業項目も、後日復習することで理解度が15ポイントから20ポイント上昇している。自由記述欄には、「貸倒れの処理と貸倒引当金の設定方法をしっかり覚えられた。(同旨他2名)」、「今回の範囲は以前やった減価償却も入っていたので比較的スムーズにできた」、「復習ができてよかった。(同旨他2名)」など、新出である「貸倒れの処理」が理解できたこと、「減価償却」、「売上原価」の復習ができてよかったことを読み取ることができた。また、「今回新たに追加された貸倒損失や貸倒引当金などに加えて、前回やった減価償却なども絡んできて、簿記入門の総まとめのようになってきているのを感じました。(同旨他1名)」と「総まとめ」の段階に入ったことをしっかりと認識した記述もあった。勘定科目で混乱した記述としては「言葉をしっかり覚えて借方と貸方どっちに置くか分からなくなってしまうようにする。」というのがあった。これは「貸倒引当金繰入（費用勘定）」と「貸倒引当金（評価勘定）」の性質の異なる2つの勘定科目が外見上似ていることが混乱の原因と考えられるので、この点の強調も必要であることを示唆する記述であった。また、この時点でクラスの約3割は授業を理解していないという結果も出ている点に注意したい。

5. 10 第12週・第13週・第14週 授業

第12週・第13週・第14週のシラバスを図表5-20に示す。

図表5-20 第12週・第13週・第14週 シラバス

授業項目	概要	授業外学習
精算表の作成	・精算表の仕組みについて理解する。 ・精算表の作成方法を学び、練習をする。 [テキスト該当章：1 2]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑬と授業外学習プリント⑬を完成させ、manabaの練習問題⑬と復習課題⑬をやる。
貸借対照表と損益計算書の作成	・損益計算の方法を理解する。 ・貸借対照表と損益計算書の作成方法を学び、練習する。 ・精算表の作成を復習し、練習を繰り返す。 [テキスト該当章：1 3]	今週の授業を復習し、来週の予習をして、出席確認プリント⑭と授業外学習プリント⑭を完成させ、manabaの練習問題⑭と復習課題⑭をやる。
試算表と精算表の作成練習	・試算表の作成を復習し、練習を繰り返す。 ・精算表の作成をもう一度復習し、さらに練習を繰り返す。 [テキスト該当章：1 4]	今週の授業を復習して、授業外学習プリント⑭を完成させ、manabaの練習問題⑭と復習課題⑭をやる。

第12週は、精算表の作成に入った。第8週～第11週で説明した決算整理事項を再度復習し、精算表の記入の仕方を説明した。第12週の主目的は、精算表をまずは作成してみることで、演習と質問の時間を多くとった。精算表の演習として、例題3問、練習問題3問の計6問を準備

した。第13週は、損益計算の方法としての「財産法・損益法」を説明し、次いで、貸借対照表と損益計算書の作成方法を説明した。最後に精算表の作成を復習した。精算表の作成は、十分な演習が必要なので、第12週と同様、演習と質問の時間を多くとった。例題3問、練習問題3問の計6問の演習問題を準備した。

第12週、第13週と合わせて精算表の演習問題数は12問となる。精算表を理解するための演習量としては十分と考えていた。第12週と第13週の授業項目理解度は図表5-21の結果となった。

図表5-21 第12週・第13週の授業項目理解度

	質問事項		YES回答率	
			YES	NO
④1	精算表とは何かを理解できたか	76%		
④2	精算表の種類を覚えられたか	71%		
④3	8桁精算表の作成方法を覚えられたか	71%		
④4	B/S P/Lの書式を覚えられたか	58%		
④5	決算整理事項を含めたB/S P/Lの作成ができるか	56%		
④6	8桁精算表の作成ができるか	54%		

回答者数 質問④1～④3(第12週)42人、質問④4～④6(第13週)50人

図表5-22 特に難しいと感じた授業項目

順位	授業項目名	人数
1	精算表の作成	25
2	減価償却	14
3	売上原価の算定	12
4	損益計算書の作成	10
4	貸借対照表の作成	10
5	決算整理全般	9
6	貸倒れの処理	8

質問④1～④3が第12週分、質問④4～④6が第13週分である。第13週には、7割以上の学生が精算表を理解し作成方法を覚えられたと回答した。特に質問④3「8桁精算表の作成方法を覚えられたか」の質問に対して「覚えられた」と回答したのは71%であった。これに対し、翌週の第13週になると質問④6「8桁精算表の作成ができるか」と質問④3と同様の質問に対して、「作成できる」と答えたのは54%と17ポイント下落している。

自由記述欄には、「精算表をまだ完璧に理解していないから復習したい。」「精算表はとても難しい。(同旨他3名)」と、精算表の作成に困難を覚えている記述があった。また、「今まで習ったことをちゃんと理解していないとだめだなと思った。繰越商品と仕入れ(原文ママ)のやり方が分からない。(同旨他1名)」など、これまでの学習項目を十分理解していないことへの不安の声もあった。第14週は、新出の授業項目はなくすべて復習をした。まず試算表作成の復習問題1問、次いで精算表作成の復習問題1問を説明後、残りの時間を問題演習と質問の時間とした。全14回の授業を終えて特に難しいと感じた項目についてアンケートを行った(自由記述方式・複数回答可)。を行った。アンケート結果は図表5-22のようになった。

これは、第1週から14週の授業項目の理解度や後述の期末試験結果とも符合する。特にクラス53名の約半数にあたる25名が精算表の作成を特に難しい項目として挙げている。

5. 11 期末試験の出題項目と得点率

図5-23に期末試験の出題項目とその結果を得点率として示す。受験者は登録53名に対し52名であった。

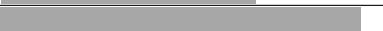
第1問は、資産、負債、純資産、収益、費用の具体的な勘定科目を指定された個数答える問題である。純資産の「資本金」の正答率が75%と低くなっているほかは80%以上の正答率であった。

第2問は、正答率87%と9割近い正答率であった。

第3問は、現金の仕訳2の正答率が低く65%であった。この主な原因は、「商品200,000円を購入し…（後略）」を仕入取引と読めずに、備品の購入として処理した誤答が8名いたことによる。また、現金の仕訳5では「手持ちの国債20,000円の支払期日が到来した。」を利息の支払いと誤解し「（借）支払利息 20,000 （貸）現金 20,000」とした誤答が15名いた。また「（借）現金20,000」は正しいが、貸方の勘定科目を「受取利息」とすべきところ、「受取配当金」や「支払利息」とした勘定科目の誤りが7名いた。第4問の販売諸掛りを含む売り上げの仕訳も前半の復習項目であるが正答率が38%と中間試験の正答率85%から47ポイント落としている。同様に引取費用を含む仕入の仕訳も正答率58%と中間試験の得点率83%より25ポイント落としている。これらはいずれも復習課題の中に数多く登場する基本的な項目なので、復習が追い付かないまま期末試験を受験したことを意味する。同様に、第3問の後半から第4問の前半までの正答率の落ち込みは、復習が追い付いていないことを表しており、復習の方法に課題を残しているといえる。これに対し第4問の後半から第5問にかけては、中間試験以後、第8週授業から新たに学習した授業項目であり、正答率が著しく下落しているのがわかる。

簿記の学習を難しくしているものは何か ―本学『簿記入門』を受講する学生を対象にした実証研究―

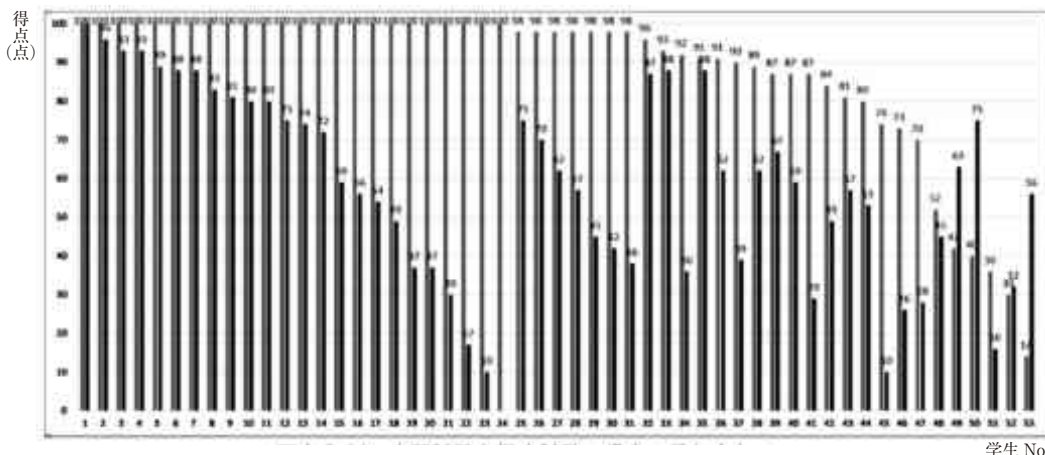
図表5-23 期末試験出題項目と得点率

	出題項目	得点率	
第1問	資産の勘定科目を3つあげる	97%	
	負債の勘定科目を2つあげる	80%	
	純資産の勘定科目を1つあげる	75%	
	収益の勘定科目を2つあげる	80%	
	費用の勘定科目を2つあげる	87%	
第2問	P/L B/S の型の理解	87%	
第3問	現金の仕訳 1 当座売上	90%	
	現金の仕訳 2 小切手と掛による仕入れ	65%	
	現金の仕訳 3 現金の当座預け入れ	92%	
	現金の仕訳 4 株式配当金領収書の受領	81%	
	現金の仕訳 5 国債利札の支払期日到来	37%	
	現金勘定の記入(3か所採点)	54%	
	現金勘定残高	40%	
第4問	販売諸掛りを含む売上の仕訳	38%	
	仕入諸掛りを含む仕入の仕訳	58%	
	当座借越取引を含む備品購入の仕訳	67%	
	土地購入の仕訳	46%	
	土地の部分売却の仕訳	12%	
第5問	売上原価算定の仕訳	56%	
	貸倒引当金設定の仕訳	46%	
	減価償却(間接法)の仕訳	48%	
	精算表記入(6か所採点)	46%	

受験者52人

期末試験の得点結果を中間試験の試験結果(図表5-11)に重ねて図表5-24に示す。この図表の縦軸は得点を横軸は登録学生を表し、ひとつの番号から伸びた左右の棒グラフはそれぞれ中間試験の得点、期末試験の得点を示す。24番は期末試験未受験である。

図表5-24 中間試験と期末試験の得点の重ね合わせ



図表5-24より、中間試験と比べて著しい得点の下落が見て取れる。これは、図表5-22に示した「特に難しいと感じた授業項目」が第8週以降に集中することとも整合する。

6. 考察

中間試験では、登録53人に対し、100点満点が24人、これを含む90点以上得点した学生が37人と、全体の70%を占めた。これを80点以上得点した学生にまで広げると44人で全体の83%となった。しかし、中間試験以降の第8週から第14週の授業では、学生の理解度が急激に落ちていった。期末試験では、100点得点者はわずか1人、90点台得点者は3人、80点台得点者は10人であった。80点以上得点者の合計は14人で全体の26%、中間試験の44人（83%）に比べて大きく下げている。第7週までの授業と第8週以降の授業でなぜこれほどまでに理解度の差がついてしまったのか。

中間試験までの授業では、第2週から第7週まで週間かけて1つのことだけを学ぶ。「仕訳と転記」である。授業項目としては、まず複式簿記の原理を学び、続いて現金預金取引、商品販売取引と進むが、簿記のフレームワークの中では、「取引を仕訳帳に仕訳し、総勘定元帳に転記する」というただ一つのことを6週間かけて学んでいる。初学者にとっては約1ヶ月半をかけて「仕訳と転記」を学ぶことになるので習得しやすい。これに対し中間試験以降の後半は、それまでとは全く異なる発想で「減価償却」、「売上原価の計算」を学び、これらの理解を前提として作業量の多い「精算表の作成」を学ぶ。結果として半数の学生が理解できないまま期末試験に臨んでしまうということが起こったと考えられる。授業の前半で簿記の学習方法が確立していないと、中間試験で高得点できても、期末試験までのどこかでつまづいてしまうことがわかる。加えて、期末試験では中間試験に比べ、簿記の学習を難しくしている外部

要因がある。それは、期末試験が他の科目と並行して行われることである。1年前期の学生は、必修科目を多く抱えている。『簿記入門』の学習に割ける時間は自ずと限られてくる。外部要因とはいえ、簿記の学習を難しくしている原因の一つといえる。

さらに図表5-24の結果より、中間試験と期末試験で得点が50%以上下落した学生グループ(学生18～24、31、34、37、41、45) 12人と50%以上上昇したグループ(学生49、50、53) 3人に着目し考察を深めたい。まず、出席点、復習課題、練習問題についてグループごとに平均をとったものを以下に示す。比較のため、クラス全体のデータも併記する。

まず、出席点の平均を図表6-1に示す。

図表6-1 出席点平均点 (3点)

	第 7 週まで	第 8 週以降	第 1 週～第 14 週
クラス全体 (53 人)	2.54 点	2.30 点	2.65 点
50%以上下落 (12 人)	2.72 点	2.26 点	2.48 点
50%以上上昇 (3 人)	2.48 点	2.52 点	2.50 点

出席点とは、出席プリントを3点満点で評価したものであり、手書きで提出する。そのため字の丁寧さなどから授業終了から翌週の授業までの授業外学習へのぞむ姿勢をみることができる。第7週までと第8週以降で比較すると、クラス全体では2.54点から2.30点と9.4%の下落に止まっているのに対し50%以上下落したグループ(12人)は2.72点から2.26点と16.9%下落している。このグループの平均得点は、第7週まではクラス全体よりも高く、第8週以降はクラス全体より低くなっている。つまり授業外学習に対する学習意欲の指標となる出席点が急降下しているのがわかる。逆に50%以上上昇したグループ(3人)では2.48点から2.52点と1.6%の上昇がみられる。

次に復習課題の平均(10点換算)を図表6-2に示す。

図表6-2 復習課題平均点 (10点換算)

	第 7 週まで	第 8 週以降	第 1 週～第 14 週
クラス全体 (53 人)	6.55 点	7.25 点	6.96 点
50%以上下落 (12 人)	6.55 点	7.36 点	7.01 点
50%以上上昇 (3 人)	5.69 点	6.52 点	5.69 点

復習課題平均点では、50%以上下落したグループが7.36点とクラス全体の7.25点よりも高い得点となっている。この結果は、50%以上下落したグループがmanabaの復習課題ではよい

点数を取っているが期末試験での得点には結びついていないことを示している。

次に、復習課題を授業終了後何日目に提出したかを図表6-3に示す。

図表6-3 授業終了から復習課題の提出に要した日数

	第7週まで	第8週以降	第1週～第14週
クラス全体(53人)	4.7日	5.2日	5.0日
50%以上下落(12人)	4.9日	5.2日	5.0日
50%以上上昇(3人)	4.3日	5.1日	4.7日

図表6-3の結果から、50%以上上昇したグループが若干早い傾向があるが際立った差はないことがわかる。しかしほぼすべての学生がメ切が近づいてからの提出となっており、授業終了直後の提出はまれであった。今後の課題を一つ発見することができた。

次に、練習問題の平均点を図表6-4に示す。

図表6-4 練習問題平均点（10点換算）

	第7週まで	第8週以降	第1週～第14週
クラス全体(53人)	8.69点	8.45点	8.55点
50%以上下落(12人)	8.06点	7.99点	8.02点
50%以上上昇(3人)	8.80点	9.25点	9.06点

練習問題を3回合格（10点換算で7点以上得点）すると復習課題が受けられる。復習課題は1回しか受験できないが、この練習問題は何回でもチャレンジできる。練習問題の平均点は、各グループの平均点そのものに着目すると第7週までと第8週以降、第1週～第14週のすべての期間を通して最下位となっており期末試験の結果と整合する。特に第8週以降では50%以上下落したグループが7.99点であるのに対し、50%以上上昇したグループでは9.25点となっており得点の差が1.26点と顕著である。これは50%以上上昇したグループが第8週以降も粘り強く練習問題に取り組んだことを示していると考えられる。

次に練習問題の取組回数を図表6-5に示す。

図表6-5 練習問題の平均取組回数

	第 7 週まで	第 8 週以降	第 1 週～第 14 週
クラス全体 (53 人)	2.1 回	1.9 回	2.0 回
50%以上下落 (12 人)	1.8 回	2.1 回	2.0 回
50%以上上昇 (3 人)	3.9 回	2.6 回	3.2 回

練習問題の平均取組回数は、クラス全体の平均が第7週までが2.1回、第8週以降が1.9回と0.2回減少しているのに対し、50%以上下落したグループでは1.8回から2.1回へと0.3回増加している。また50%以上上昇したグループでは3.9回から2.6回へと1.3回減少している。これはクラス全体と50%以上上昇したグループがより少ない回数で合格できるようになっており学習効率の上昇が認められるのに対し、50%以上下落したグループは逆に学習効率の下落が認められる。

以上より、中間試験と比べて期末試験の得点で50%以上下落したグループの試験結果と整合するデータは、図表6-1の出席点の平均、図表6-3の練習問題の平均点、図表6-5の練習問題の平均取組回数であることがわかった。これらはいずれも学習期間全体を通した粘り強さを反映する指標である。クラス全体の22.6%にあたる50%以上下落したグループに属する学生12人は、第8週以降の難易度の上昇にともない粘り強く問題と取組むことを放棄してしまったといえるだろう。これはこのグループに属する学生の「あきらめやすさ」を表していると言い換えることもできる。

次に視点を変えて中間試験の復習状況をみてみたい。期末試験の第3問と第4間で中間試験の復習問題を出題した。第3問は1題4点で5題出題しすべて復習問題（20点）であり第4問は1題4点で5題出題したうち2題が復習問題（8点）である。その結果を図表6-6に示す。

図表6-6 期末試験第3問と第4問の平均点

	第 3 問の平均点 (20 点満点) すべて復習問題	第 4 問の平均点 (20 点中満点) 8 点が復習問題
クラス全体 (53 人)	17.2 点	8.9 点
50%以上下落 (12 人)	10.3 点	4.0 点
50%以上上昇 (3 人)	13.3 点	5.3 点

第3問の平均点は、クラス全体が17.2点であるのに対し50%以上下落したグループが10.3点、50%以上上昇したグループが13.3点となっている。第4問の平均点は、クラス全体が8.9点、

50%以上下落したグループが4.0点、50%以上上昇したグループが5.3点となっている。これは50%以上下落したグループが第7週の間試験時点で正解した問題を期末試験では正解できていないことを示している。これとは対照的に50%以上上昇したグループではクラス全体の平均点には及ばないが50%以上下落したグループよりもよい成績となっている。50%以上上昇したグループが中間試験の復習を含めて継続的に学習した結果と考えることができる。これは50%以上下落したグループの「あきらめやすさ」とは対照的に50%以上上昇したグループの「粘り強さ」を表している。「あきらめやすさ」の背後には、未消化の授業項目が蓄積していく負担感があると考えられ「簿記は難しすぎる」(20番の学生の最後の感想)となってしまう。「あきらめやすさ」から「粘り強さ」への転換を促す必要がある。

最後に、簿記の学習を難しくしているものとして以下の2点を指摘したい。まず1点目が図表5-22に示した各授業項目である。2点目は「あきらめやすさ」である。これら2点の具体的改善策の構築が今後の課題である。簿記を学ぶことの有用性を説きつつ内発的に問題に取り組む姿勢をはぐくむことを目指したい。

7. 終わりに

本研究の実践的貢献について述べる。大学初年度における簿記導入授業を担当する教員にとっては、学習に困難を覚える学生をいかにして減らしていくかが悩みの種である場合もあるだろう。本研究は、教室での授業をイメージし、時系列に沿った実証データと学生の声を明らかにしたことに実践的貢献があるといえよう。本研究の限界としては、筆者の担当クラス53人のデータであり、この結果を一般化するには更なるデータの蓄積が必要であることをあげることができる。また、今後の課題として、更なる実証データの蓄積と次年度のシラバスとテキスト修正をあげることができる。

〔参考文献〕

- 大藪俊哉 (1993) : 「簿記教育の種々相」『横浜経営研究』、第14巻2号、pp.121-133.
- 粕谷和生 (2009) : 「導入段階における簿記教育の課題とその解決への取り組み」『経済系：関東学院大学経済学会研究論集』、第239集、pp.127-137.
- 木本圭一 (2002) : 「簿記教育上の認識ギャップ—測定ツールとしての E-Learning の可能性」『関西学院大学商学論究』、第50巻第1/2号、pp.185-200.
- 金融庁 HP (2019) : 「平成30年公認会計士試験合格者調」(2019/3/21閲覧)、
https://www.fsa.go.jp/cpaaob/kouninkaikeishi-shiken/ronbungoukaku_30/03.pdf
- 河野勉 (1998) : 「企業税務における基礎的簿記教育の重要性—日商簿記検定3級を中心として」『桃山学院大学経済経営論集』第39巻第4号、pp.175-199.

- 国税庁 HP (2019) : 「平成30年度 (第68回) 税理士試験結果」 (2019/3/21閲覧)、
<https://www.nta.go.jp/taxes/zeirishi/zeirishishiken/shikenkekka2018/01.htm>
- 近藤努 (2018) : 「企業における日商簿記検定の利用状況―東京証券取引所上場企業に対するアンケート調査をもとに―」『会計プロフェッション』、第13号、pp.349-363.
- 斎藤孝一 (1990) : 「簿記原理に対する学生の意識と問題点」『経営研究』 (愛知学泉大学)、第3巻第2号、pp.139-159.
- 椎名市郎 (1987) : 「複式簿記の原理とその論理的導入法 (Ⅳ)」『中央学院大学商経論叢』、第1巻第2号、pp.61-84.
- 鈴木茂 (2004) : 「コンピュータを手段とする簿記原理と教育」『産業能率大学紀要』、第37号、pp.39-48.
- 瀧田輝己 (1994) : 「大学における簿記教育と各種資格試験」『同志社商学』、第45巻第6号、pp.83-112.
- 中川健蔵 (1990) : 「大学簿記会計の基礎教育指導に関する一考察」『北星論集 (経)』、第27号、pp.135-146.
- 日本商工会議所 HP (2019) : 「受験者データ」 (2019/3/21閲覧)、
<https://www.kentei.ne.jp/bookkeeping/candidate-data>
- 原俊雄 (2018) : 「簿記教授法の再検討―導入段階での教育を中心に―」『横浜経営研究』、第38巻第3・4号、pp.87-97.
- 久野秀男 (1990) : 「批判的『簿記テキスト』試論―腑に落ちない『簿記テキスト』の常識―」『学習院大学経済論集』、第26巻第3・4合併号、pp.1-37.
- 茂木虎雄 (1988) : 「複式簿記論の基本原則―勘定理論と簿記教育―」『立教経済学研究』、第42巻第2号、pp.99-118.
- 山田真弘 (2017) : 「日商簿記検定「初級」創設に関する一考察：初学者に対する簿記会計教育の視点から」『関東学園大学紀要 Liberal Arts』、第26集、pp.26-34.